

真杉静枝と温又柔の比較研究の試み——グローバル化を視座にして

台湾大学 范 淑文

グローバル化を命題とした場合、国と国とのつながり、世界を一つの村と見なす世界観など一般的には「結合」という発想が根底にはあることは言うまでもない。その際、言葉の壁にぶつかる場合がある。ここではこの点を捉え、近現代文学の立場から、言語問題に真っ向から取り組んだ日本人と台湾人の女流作家の作品を取り上げ、主人公の眼差しを比較し、二つの文化を往還する姿を探ってみようと思う。一人は日本植民地時代に台湾に在住していた女流作家真杉静江で、もう一人は最近文壇で頭角を現した日本在住の台湾人若手女流作家温又柔である。

真杉静枝は、福井県に、1900年11月に生まれ、三歳の時に、神官として台湾に赴任する父真杉千里とともに一家で台湾に移住した。数え年15歳で台中病院付属の看護婦養成所に入学、のち台中病院に看護婦として勤めていた。17歳の秋、彼女は両親の手で強制的に病院をやめさせられ、台中駅の助役で13歳も年上の藤井熊左衛門と結婚したが、4年目の21歳の時に出奔、大阪の祖父母のもとに身を寄せ、武者小路実篤や中村地平などと知り合い、作家の道を歩み始めた。その後も、仕事や両親や妹たちに会うために台湾に何度も訪れた。つまり、真杉静江にとっては台湾は人生の故郷のような存在であることは否定できず、作品にもそのような心境や言葉の問題が盛り込まれている。

一方、温又柔は三歳の時に、父親の仕事関係で親子三人で日本に渡り、幼稚園から日本人と一緒に教育を受けたため、ほぼ完全な日本育ちとして成長してきた。が、うちで使用している言語や周りの子どもの状況から、自分自身の中で「一般的」な日本人とどこかが違うことを感じるようになっていったという。

二人の作家の生きた時代は80年間ほど隔たってはいるが、成長期に置かれた環境や遭遇の原点がどこか似かよっているように思える。そこで、言語、その言語の齟齬によって生じた問題を検討したうえで、時代が異なっていながらも共通している点の有無について考察していくのを本稿の主旨とする。